



EIT Journal

56

November 2007

原子力50年 第二回

エネルギー政策の最新の動向

新エネルギー普及の制度とコスト負担

原子力委員会での9年間を振り返って、今思うこと

社団法人 エネルギー・情報工学研究会議

- 1 **原子力50年 第二回**
[森 一久]
- 13 **提起1 エネルギー政策の最新の動向**
[国立大学法人 東京工業大学教授 柏木 孝夫]
- 20 **提起2 新エネルギー普及の
制度とコスト負担**
[国立大学法人 一橋大学大学院商学研究科教授 栗原 史郎]
- 27 **原子力委員会での9年間で
振り返って、今思うこと**
[評論家・ジャーナリスト 木元 教子]
- 39 ●編集後記

「原子力50年」



今回は、森一久氏に話を聞きました。素粒子論を研究していた学究の徒が、科学技術のジャーナリストとなり、若い同志を集めて「原子力談話会」を作って日本に原子力開発をどう進めるべきかを大いに議論してこられました。原子力黎明期に政・官・財のはざまで原子力を担ってこられた森さんの秘話、そして、いまでも変わらぬ情熱はぜひ歴史として残しておきたいと思い、今日かかえる問題にも言及してもらいました。

第二回

森 一久

後藤 このほど森さんがまとめられた『電力経済研究所小史』を読みました。そこで書かれている内容は私自身の体験と重なっている部分がたくさんありました。あの時代、昭和25～26年頃から第1次石油ショックまで、原子力が初期トラブルを起こしていた時代です。私は政党にいて原子力基本法にも関わってまいりました。森さんは、原子力の開発体制をつくるためにご苦労されたと聞いていますが、そのあたりのお話しから聞かせていただきたいのです。

森さんは京都大学物理学科で、湯川秀樹先生に師事されて素粒子論を学ばれたそうですね。その後、京大を卒業、中央公論に入社されました。「自然」や「婦人公論」の編集で9年間、勤務された後、日本原子力産業会議設立にかかわりそこで働かれるようになりました。

森 原子力については、それ以前から関わって

います。私は原爆を受け家族5人を失った側です。

後藤 そうですね。その思いも含めて語っていただきたいのです。当時は大変だったと思います。政治の場では「7人の侍」（中曽根康弘、松前重義、前田正男、斉藤憲三、稲葉修、志村茂治、岡良一）らを中心に進められましたが、森さんの場合は半分が財界、もう半分は学者の世界にかかわっておられました。

森 昔話だけではしょうがないので、現状批判になりますが……。

後藤 私も『険しきことも承知して—私のエネルギー五十年—』を書いた時、たくさんの方々から、社会党は原子力推進だったのですかと言われたことがあります。50年前の出来事は遠い昔のことになってしまったのです。

もりかずひさ：京都大学卒。故湯川秀樹博士の下で理論物理学を学んだ。中央公論社で記者として原子力問題取材。1956年（社）日本原子力産業会議設立時に職員となり、専務理事、副会長を歴任4年前から友人と共同事務所UCNを設立、代表世話人。広島市出身。81歳。